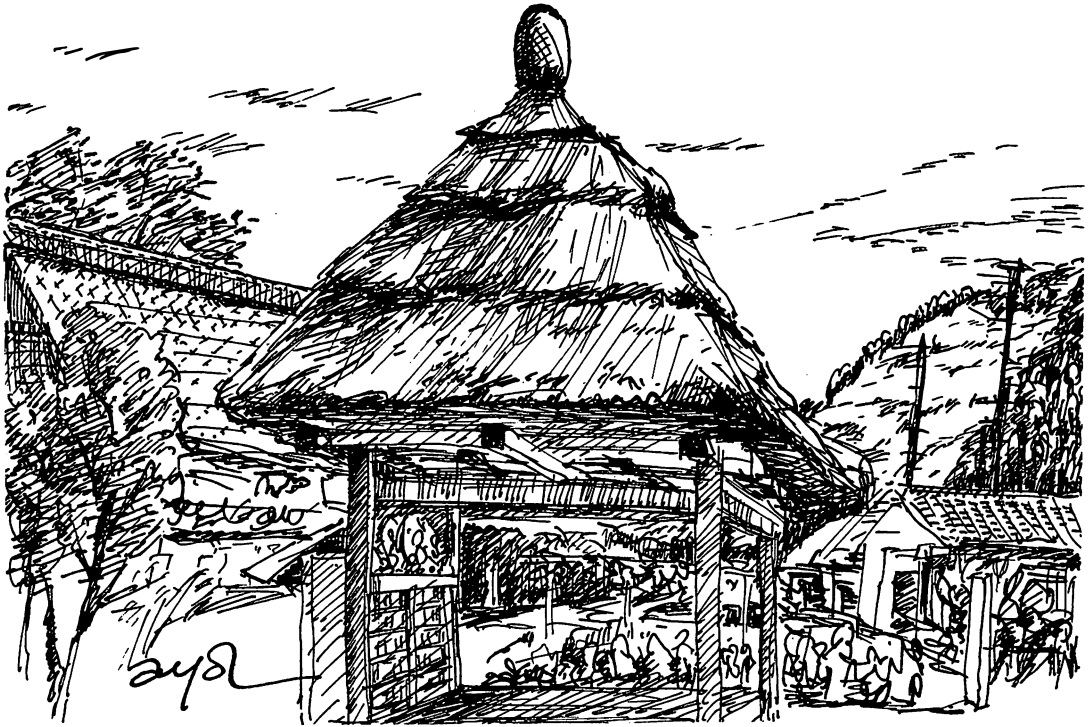


まちづくりネットワークえひめ

舞 とうん

VOL 46



野村町 茶堂

特 長寿社会 —真の豊かさを求めて— 集

地域を支えるネットワーク

- 地域活動の中心的役割をめざす高齢者
- 地域を支えるネットワークの原点は農村社会にある
- みんながキラキラ輝いている町に
- まちづくりが結ぶネットワーク
- 大自然のふところに抱かれて

〔特〕『長寿社会 一真の豊かさを求めてー』〔集〕

地域を支えるネットワーク

地域活動の中心的役割をめざす高齢者……………	松山市／亀田 政雄……………	2
地域を支えるネットワークの原点は農村社会にある……………	美川村／阪本 雅彦……………	4
みんながキラキラ輝いている町に……………	伯方町／中野 和美……………	6
まちづくりが結ぶネットワーク……………	西条市／山田 亨……………	8
大自然のふところに抱かれて……………	野村町／土居 真二……………	10

論談—まちづくり—

生活者感覚のまちづくり……………	地域総合研究所／猪爪 範子……………	12
------------------	--------------------	----

ふれあい広場

リレーでちょっとーク（松山市・城辺町から）……………		14
----------------------------	--	----

地域を生きる

私たちのまちづくり……………	西海町／池田マキ子……………	16
----------------	----------------	----

研究員レポート

メダカの住める“水”を取り戻せ！ 一久万中学校科学クラブー……………		18
まちづくり探訪……………		20
不思議の国 長野……………		22

風おこしのちかい

一人のつばやきを風に……………	高須賀忠篤……………	24
-----------------	------------	----

Information

媛のくにフラッシュ〈東予市・面河村・小田町・河辺村〉……………		26
地域づくり講演会・シンポジウムのお知らせ……………		28
ビデオライブラリー……………		

特集 “長寿社会

今号のテーマ

地域を支えるネットワーク

今日、豊かで潤いのある長寿社会の実現を目指し、全国各地で様々なまちづくり活動が展開されている。そうした活動は、決して一人で成るものではなく、個人・行政・各種団体等が連携・協力し、地域全体のネットワークを形成して取り組んでいく必要がある。

そして、私たちは、そのネットワークを活かしながら自己を高め、感性を磨き、真の生きがいやライフスタイルを発見することで、地域への愛着や誇りを感じることができるとは、ないだろうか。

大切なのは、地域の人たちが、お互いに社会の一員であることを自覚し、相互に助け合い、地域のネットワークをより密接にしていこうことだ

と思う。

そこで、特集のメインテーマ「長寿社会―真の豊かさを求めて―」の第三集として、今号では、サブテーマを「地域を支えるネットワーク」とし、それぞれの地域活動の実態に触れながら、「求められる長寿社会」のあり方を考えることとします。

（編集子 竹松）

表紙の言葉

茶堂という小さなお堂が県内に多く見られます。三百は有にあると言われています。

休む場所の少ない地域に、お遍路さんや通行人のお茶の接待に使われていたのですが、風習も廃れポツンと建っている姿は郷愁を誘います。

柳原あや子



野村町 茶堂

期待を込めて

愛媛県信用農業協同組合連合会

代表理事会長

宮本 衛



ご案内のとおり、我国は戦後五十年という一つの節目に当たり、国際化、自由化の進展する中で、歴史的に大きな転換期を迎えているところでもあります。

現在の激変する政治体制、経済活動、金融市場の動向を見ていますと、このことは、戦後の国家復興という一つの大プロジェクトの完成を意味するところのものであり、我国の戦後処理体制の終焉を告げるべき動向のように見ることができそうです、それはまた、来たる二十一世紀を歩むべき国家の基

盤作りと新しき価値観の創造に向って模索する状況を呈しているようにも思えるのであります。

二十一世紀への展望と新しき価値観の創造、それは二十世紀の反省の中から構築されるのではないかと思います。

二十世紀という時代は、戦火による破壊とその復旧に費やされた中から構築され、物質的価値観を強く追求し、人間感情の疎外された時代であり社会であったように思われます。

この反省に人々が目覚めるとす

るならば、二十一世紀においては、全世界において共存・共栄の社会構築を基盤とした精神的安定感と心の豊かさに価値観を求めるべき時代の展開がなされるのではないかと推察するところであります。

このように、二十一世紀を展望いたしますと、二十一世紀という時代は、都市集中型ではなく地方分散型の地域社会を基盤とした時代が到来するように思えるのであります。

精神的安定と心の豊かさの追求、それは緑豊かな大地の中で、そこに織り成す自然環境の変化にも調和して、その恵みによって育まれてきた地方文化と生活環境の支えなくして満足感を充足する事は不可能であると思えるからであります。

二十一世紀に向って、その基盤・指標となるであろう地域社会の充実に取り組んでいかなければなりません。

我々系統組織においても、その組織創立の理念に立ち、愛媛県の各々の地域にあつて、その大地を

基盤として、地域の風土・気候に適応し、人々の生活の中に密着して、地域から発せられるニーズに迅速・適確に対応する、延いては、そのニーズ充足の和をもって地域社会に、地域社会の和をもって愛媛県の発展に貢献すべく事業を展開しているところであります。

このことは、皆様方のご提唱、ご活動されています。『ふるさとづくり運動』に相通ずるものであると思います。

我々もまた、組織運動のその理念到達の使命によりて、皆様と共に地域社会の発展をもつて二十一世紀を歩む指標とすべく努力を傾注していきたいと決意するところであります。

地方から発信される人々の心の豊かさが、世界の流れを動かす程の、そんな二十一世紀へのビジョンを描いては組織活動の将来展望に心巡らす今日この頃であります。

特 長寿社会集

真の豊かさを求めて



地域活動の中心的役割を 目差す高齢者

松山市ボランティア緑寿会会長
亀田 政雄



はじめに

高齢者が長年にわたって蓄えた経験や知識、技能を地域活動に役立てるとともに、自らの生きがいを作り出そうと、昭和六十年四月高齢者ボランティア養成講座を修了した二十九人が『緑寿会』を結

成、活動を始めた。現在会員一五九人（男性六十八人・女性九十一人・平均年齢六十七才）一日平均十五人の会員が、松山市内の何処かで何等かの活動を続けています。以来十一年、高齢化の進展は急ピッチで特に愛媛県は高齢化率十五・五％、全国平均より十年も早く進んでおりその対策は急がなければなりません。

さて、会結成当時のボランティア活動は、一部の献身的な人が、身体的、経済的に恵まれない人に対する奉仕活動というイメージが強く、福祉施設を中心とした訪問活動が主でありましたが、最近では豊かな人間性づくりから新しい地域社会づくりへと発展し、活動する側は自己成長（自己実現）の場として生きがいを求める活動へと展開しはじめました。その理由は高齢化の進展、生涯学習の普及、ノーマライゼーション理念の浸透、加えて阪神大震災における救援活動等により活動内容や領域が、文化・教育・医療・保健・自然環境・国際貢献・地域づくり等暮しのあらゆる面に広がってきたことにあります。

また、高齢化社会から生じる現象（平均余命、少子化、ねたきり痴呆症等）と課題（医療費の増加、年金問題、人口減少、介護問題等）に対応する施策は避けて通れない重要な課題となつてきています。

加えて福祉に対する考え方の変化があります。従来の福祉は、一部の国民の問題であって、その解決は民生委員や福祉事務所へ任せておけばよいという他力本願の与えられた福祉といわれていましたが、高齢化社会へ入ってからは、応分に負担する福祉へ、更に自立する福祉へと転換をめざし、みんなが参加し、みんな で築きあげる福祉へと変りはじめました。

従って福祉施設重視の考え方を拡大発展させ「地域での福祉の充実」という新しい社会福祉の構築が求められ「貧しい人や障害者の為のもののみでなく、総ての人々の幸せと豊かさを追究し、暮らしやすい、生きがいの持てる社会づくり」が共通の理念となつてきたことです。

このような考え方の変化をもとに私たちは、活動の位置づけを「地域活動を支える中心的役割は高



老人ホームでさつきの剪定



よ万才・竹とんぼ・しめ飾り・お手玉・折り紙づくり)。環境美化。庭木盆栽の手入。町内会・公民館・地区社協・老人クラブ・婦人会等の世話役活動。

次にコミュニティネットワーク事例として、松山市を五つのブロック（東西南北、中央）に編成し地域に密着した活動を盛んにする。

年齢者が担おう」として、「高齢者の持ち味を発揮しながら地域に密着したボランティア活動」を目指しています。

四人に一人の高齢者時代を迎える地域活動においては、高齢者が先導的パートナーになろうとの意気込みです。

一、活動事例

世代間の交流、友愛（芸能）訪問。話し相手。朗読奉仕。紙芝居。愛の座布団づくり。伝承活動（郷土史跡めぐりやお話し・郷土芸能い

ークづくりを行政・各種団体・企業・個人等が密接な連携のもとに取り組むことが要請されます。特に二十一世紀の課題は「介護の問題」といわれ、中でも「在宅介護」には地域社会全体で支え合うネットワークづくりが緊急対策として取り組まれつつあります。

(三) 現役を離れた高齢者は、社会からの引退者、あるいは要介護者の予備軍と捉えられ、ケアを中心とした福祉対策に重点が置かれておりますが、高齢者の特性を「地域社会を担う貴重な資源」と位置づけ、積極的に社会活動に貢献する機会をつくることが肝要だと考えます。

高齢者のパワーを引き出し、生きがいや役割についての意識を地域活動に結びつけることを切望します。

(四) 高齢者と中青年層とのネットワークづくり

高齢者と中青年層との「長寿社会対策推進会議」を設けるなど、高齢者・中青年層・婦人

層・学識経験者等で、超高齢化社会への対応策等を話し合い、それぞれの特性、役割分担、協力体制など相互理解を深めるためのネットワークづくりが「生き生き長寿社会」の構築に重要な役割を果たすと思われます。

三、今後の展望

低調であった我が国のボランティア活動は、数年前から四人に一人が意識するようになり、特に阪神大震災では、ボランティアに駆けつけた人三十万、少しでもかわった人、義援金（品）を送った方々等を含めると、一億の人々が参加したといわれています。

熱しやすく、冷めやすいといわれる日本人気質をぬぐい去って、地についた活動が期待されます。

おわりに

私たちは、高齢化社会の現状と推移を、積極的に受けとめ、ボランティア活動が、日常生活のひとこまとして組み込まれ、当たり前の行為となつて、地域活動が展開されるための先導者となつて活動することを願っております。



地域を支えるネットワークの 原点は農村社会にある

美川村農林業後継者クラブ会長

阪本 雅彦



はじめに

私は、現在美川村で農業を営んでいます。村では、農業や林業を営んでいる若者が、お互いに研修したり、交流を深めるために『農林業後継者クラブ』が組織されています。現在、二十人が会員となっております。独自の活動や村で開催さ

わち若者が後継者として残っていないことが原因でした。そこで私がカンフル剤となり頑張っで見ようと思いましたが、なかなかうまくはいきませんでした。当時、『雅彦君！農業後継者に入っとるん？』と、青年団のお姉さんから驚きと異端の目でみられたのは、正直参ってしまいました。青

れる、『みかわ川まつり』『みかわまつり』などのイベントにも積極的に参加しています。私が『農林業後継者クラブ』に入

年団とさほど変わったものじゃないと思っていた私は、何か変なものに入ってしまったのではないかと、悩んだものでした。しかし、農業をして美川で生きて行くことに稚拙ながら夢を持っていた私は、後継者クラブに入るのは当然のことだし、そうあるべきだと思ったものでした。

農林業後継者クラブ

後継者クラブに入会し活動を



ほづれん草プロジェクト活動

行っていくうちに、後継者クラブの活動が村の仲間たちにさえあまり理解されていない現実を知り、まず後継者クラブのイメージを変えることから始めなければと考えました。そこで、会長就任を機に、会員の年令の若返りと、女性会員の勧誘を行いました。それは、純粹な農林業の後継者だけでは活動が行き詰ってしまうので、農林業の後継者でありながら勤めに出てくる青年や女性も制限することなく加入してもらい、イメージアップを図りたいの思いがあったからです。また、農林業にかかわりが少ない勤めに出てくる女性にも、後継者の活動を通して、農林業や農山村の生活を、効率第一主義や経済価値優先の物差しで計るのではなく、農林業が自然や人と協調しながら息づいてきた根本的な部分と同時に、輸入自由化・規制緩和で切り捨てられようとしている現実等を理解してもらいたいと思ったからでした。頑張っ

保することができました。また、一つの団体のみでなく青年団員として、ともに活動していた仲間がいたことも、会員の確保ができた要因の一つに上げられると思います。

近年、後継者クラブが特に主体的に取り組んできた事業は、『丹波の黒大豆』の栽培です。これは、栽培が比較的容易で、なおかつ収量も多く、収入も見込めるとい



ほっれん草畑をじっと見つめる

阪本さん

ことで取り組んだものです。そして、私たちは、何か目標を持とうということと皆で決定した『スペースワールドに行こう!』を合言葉に、六月の種蒔きから十二月の選別作業まで、天候に振り回され、日程と人数の確保に明け暮れながらも、百五十キロの収量を確保し、販売も予想を上回ることができました。また『スペースワールドに行こう!』も実現することができました。もちろん新規に加入してもらった女性会員の協力があつたことを忘れてはなりません。

私の思い

最近思うことですが、農山村地域で生活していても、今では職種も、勤務形態も、まして、通勤地域も異なる者がどうしが生活しているのが現実です。それだけに、お互い同士が結び付くことには努力も必要です。農山村地域ですらそんな状況ですから、都市の人々和我々が結び付くことは、なおさら困難な状況かも知れません。

田舎での生活は、効率は悪くて

もその距離を埋めるだけの触れ合い、深いかわりあいがあるが今も残っています。人と人との結び付きなくしては組織や団体、地域の発展は困難です。そして、そのかわりあいこそがネットワークではないのかと考えます。また、一人ひとりが多くの人とかわり、さらに様々な活動とかわかることこそ今の時代に必要なのではないでしょうか。そして、それは長寿社会においても機能し得る技法でもあるのではないのでしょうか。

おわりに

私たち農林業に従事し、農山村で生活するものは、人間が生存していくために不可欠な生産物をつくり育て、山や田畑や川などの国土を守っていることをさらに認識しなければなりません。そして、

個人主義に破壊されつつある農山村ですが、同じ地域で生活する者どうし、さらにかかわりあいを深めなければなりません。また、さらに立場の異なる人々と交流し、特に、都市と農村という立場で共

榮するためには、お互いがかかわりあう機会を持ち、理解し合うことが大切です。

これからも、田舎の良さを残すために、後継者クラブが地域づくりを実践する共同体の核となるように活動していきたいと考えています。





みんながキラキラ 輝いている町に

伯方町女性塾塾長
中野 和美



から、「活動する女性のグループ」の組織をとの要望があったことを契機に、二十二人の元気な女性が集まりスタートしました。塾のテーマを「高齢者とのふれあい」の中で、高齢化社会の課題を探り、それに取り組む」とし「老いることは、自分たち自身の問題でもある」という視点で、

様々な課題を考える機会を持ち、学習活動を積極的に進めています。

◎老人会とのかかわりの中で

「おはようございます。今日は暑くなりそうですね」いつもリハビリ教室でお会いするおじさんと挨拶をかわす。以前は、「大変だなあ!」と思うだけで、声をかけることはできなかったのですが、今では、町で出会った時に、笑顔で話しかけられるようになり、女性塾に参加しているお陰だと思っています。

伯方町女性塾は、平成四年に県

何をどう進めていけばいいのかわからない中で、まず、伯方町の老人会（五地区）のみなさんと交流し、ふれあいを深めていこうと考え、さっそく実行にうつしました。手作りのお菓子を一緒に食べながらお喋りをしたり、ゲームをした

草抜きの後入園者と（楠風園）



り、時には、町内の人形劇のグループと一緒に老人会のみなさんとの交流を深めていきました。

この時感じたのは、高齢者はパワーがあつて何でもできるんだという事です。

そこで私たちは、こういう集まりに出てこれない人たちにも手がかしてあげなくてはと思いました。ただ、この時は、高齢者との関わり方について少し認識不足だったように思います。何かしてあげようという、一方的な気負いのよう

なものが強すぎたように思います。これからは、老人会の人たちとのつながりをさらに強いものにして、例えば「Yさんが寝込んだんじゃが、あんたらちよつと手伝うてやつてくれんか」という言葉が気軽に女性塾にかかってくるような、心と心のふれあいをもちと深めていきたいと思っています。

◎楠風園とのかかわり

初めて老人ホームを訪問した時、どのように声をかけたらいいのかわからないが、指導員の方にお年寄りとの関わりあい方を教えていただいたので少し安心しました。

戸惑いながら訪問した老人ホームでしたが、ガラス拭きや草抜きなど一緒に作業していくうちに、「ありがとう」「苦勞さん」と声をかけてもらえるようになり、お互い打ち解け合うことができ、お喋りやゲームも楽しくできるようになりました。

ただ、私たちの思いすごしかもしれませんが、老人ホームの職員のみなさんに、私たちの活動が理

解されていないのではと少し不安になりました。

そこで、塾生の間で話し合い、その結果、「ホームの人たちはとても喜んでくれているのだから、もう少し続けて見よう。園の方に迷惑のかからないように」という意見がでて、もう一度頑張ってみることにしました。その後、私たちの気持ちを通じたのか、職員のみなさんにも笑顔で迎えてもらえるようになり、ホームの人たちも私たちが心待ちにしてくれるようになりました。

今では、帰りの車の中でホームでの楽しかった事が話題となっています。

そして私たちは、ホームのみなさんを人生の先輩として、古きよき時代の話など、どんどん話してもらえそうな雰囲気づくりをしていく必要があると考えています。そのためには、相手の立場になって物事を考え、また、相手の思いをしっかりと受けとめていくことが大切だと思います。私たち自身のためにも。

◎地域において

月一回第一土曜日にリハビリ教室に参加しています。これは、町の保健福祉課から協力してほしいとの要請があり始めました。

理学療法士さんの指導で、グループに分かれリハビリ・レクリエーションをする際、ゲームをしながら、「私たちはリハビリ教室に参加しているはずなのに介護や介助をするわけでもなく同じように



リハビリ教室

体操するだけでいいのかな」と思っていました。

しかし、これは私たちの認識不足であることにすぐ気が付きました。同じ場所に健常者と障害者がいることが大切だったのです。そして、療法士さんが「この場で笑顔を見ることができ、笑い声が絶えず起つていればそれでいい」と言われた時に納得しました。それから、月一度のこの教室に参加することが楽しくなりました。

その他にも五月の野外訓練、十二月のクリスマス会にも参加させていただき楽しく活動しています。

◎学習面において

老人福祉施設のあり方について学習をするために「海光園」「虹の家」「成和園」「阿育苑」等を訪問しました。訪問に際して私たちは、そのスタッフ、設備、ホームの人たちの表情を注意して見るように心がけました。老人ケアは、そこで働いている人の人間性が大切です。設備以上に欠かせないものだと思っています。

また、読書学習も積極的に行っており、高齢化社会に関する本を購入し、回し読みをしてお互いの思いを話し合ったりしています。

◎おわりに

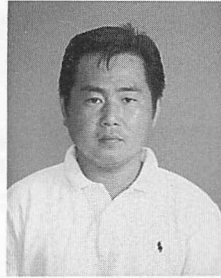
あるビデオ鑑賞会で「森の中の淑女たち」を見て出演者の人たちに勇気づけられたことがありました。「知りたい」「みたい」「したい」で、何事にも一人ひとりが前向きに取り組んでいくことで女性塾が発展していくと思うのです。そして、昨年度から各自ノートを持ち、気付いたことは書き留めるようにしています。人に見せるためではなく自分自身のために。

こうした努力を積み重ねながら、伯方町において、女性塾のメンバーを各地区に増やし、人的ネットワークを生かしながらアンテナをあちこちに張り、しっかりと受信できるような頑張っていこうと考えています。そして、「こんにちは」「お元気ですか」「お気をつけて」といった言葉が飛びかう町になればすばらしいと思います。



まちづくりが結ぶ ネットワーク

西条VYS連合協議会会長
山田 亨



り活動が始まりました。この懇話会は、構成メンバー二十歳代から七十歳代の老若男女二十五人で、六分科会（福祉・水・文化と教育・都市整備・環境（ゴミ問題）・まつり）に分かれ、それぞれ二年間にわたり、会議のほか視察・見学・現地調査・講座受講等を実施しました。

この懇話会在籍

我が街西条は、南に霊峰石鎚山を頂き、北は瀬戸内燦灘に面した人口五万七千人の工業都市です。平成四年九月に、市民の持つユニークでフレッシュな発想を市政に反映させることで、温かく豊かな潤いのあるまちづくりを一層効果的に進めることを目的に設置された、「ふるさとづくり市民懇話会」の一員として、私のまちづく

中には、県主催のふるさと再発見・創造塾二期生への推薦を受け、同年代のいろいろな立場でまちづくりに関わっている仲間と知り合い、交流を深めることができ、如何にすれば自分たちのまちがより良いまちになるか、討論を重ねました。この創造塾で学んだことは後述になりますが、私のまちづくりに対する意識改革となりました。

また、いろいろなことに首を突っ込むのが好きな性格からYEG（商工会議所青年部）に在籍し、経済から見たまちづくりをテーマに、如何にすればより良い西条になるか、主に先進地視察を行い、地元YEGとの討論会を開催し、情報交換の中から何かプラスになることが無いかな欲に情報収集を行いました。そして、この情報の中で本当に有益な情報とは、人々との直接的な触れ合いを通じて



深夜の激論創造塾の一夜

伝わるが多く、人的ネットワークづくりの必要性を感じるようになりました。如何なる組織でも、建前でなく本音で対応できる人同士でないと本当のネットワークづくりはできないと思います。YEGの中で経験させて頂いた話術は、人前であること無く、人の心を掴む話し方ができるように思われ、ネットワークづくりのための大変大きな武器となりそうです。

《百聞は一見にしかず》

各団体でいろいろな先進地へ視察に行きました。小布施・飯田・和田・恵那・高山・津山・下松・竹田・近江八幡・吹田・等々。思い出せば本当に良い経験をさせて頂きました。しかし、残念ながら今だ思い出の域を脱せずその見聞を活用できていません。決して物見遊山ではなく、事前調査をし、現地担当者やアポイントをとり、その場ではまちづくりに対する並々成らぬ思い入れのある方のお話を伺い感銘を受けながらも、何

か自分のまちには当てはまらないとか、ちょっと環境が違うなど尻込みをしまっているのが現状です。せつかく広い視野を持つと飛び回っても、自分にブレーキを掛けるような意識ではまだまだだなと自問自答しています。

百聞は一見にしかず・・・ここまできたら『百見は一試にしかず』です。棒ほど願えば針ほど叶う。思い切ってやってみれば、予想するほどに心配ごとは現実起こらない筈です。ヤレなかったのか、ヤラなかったのか、自分のまちづくりに対する前向きさが大いに影響するものと考えます。

そこで、西条市主催のふるさとづくり市民懇話会は、平成六年八月をもって

☆福祉分科会

・高齢化社会に対応したケアシステムの構築

☆水分会

・うちぬきの保全とPRのための「みずの日」の制定

☆文化と教育分科会

・まちづくりはひとづくりという

観点に立った地域リーダーの養成
☆都市整備分科会

・ハードとソフトの融和を考えた都市形成ビジョンの確立

☆環境分科会

・ごみ減量化のための「ごみゼロの日」の制定と「ごみ減量委員会」の設置

☆まつり分科会

・運営組織の充実強化と観光化に



市民懇話会

「三分別の視察」

関する諸々の方策

等の二一五項目の提言書を市長に提出して解散しましたが、一度できたネットワークはおいそれと消えるものではありません。やはり意を同じくした仲間、その後提言書が如何に活用されているか気になるようで、再び情報交換がなされるようになりました。そして、自然の成り行きですが、また市民懇話会を復活させようということになりました。

しかし、一部メンバーから「今更何をするの!」との意見があり、討議の結果、提言書を基本に自分たちで実現に向けて新しい団体を作ることになりました。この団体は、行政の援助を受けて活動するものではありませんので、元市民懇話会の一部メンバーで準備委員会を設立して、大雑把ではありますが規則を作り、平成七年中の発足を目指し日夜激論を交わしております。

小さなネットを徐々に大きくし、具体的に絵を描いて人前で宣言してみようと思っています。ハッタ

YEGの視察

大分県竹田市の湧水群



リ八割、ウソ二割の夢のようなまちづくりでも、強い願望や目標を持った多くの仲間がいれば現実になるかも知れません。

この原稿を皆さんが読まれている頃には、西条にもまちづくりのネットワーク、仮称『ふるさと西条塾』が誕生しているはずだ。



大自然のふところに 抱かれて

野村町レクリエーション協会
土居 眞二



野村町は愛媛県南部の中山間地に位置し、四国山脈につらなる四国カルストの源氏ヶ駄場（標高1400メートル）をはじめとする急峻な山々に囲まれています。これらの山々から、本町を貫流する愛媛県最大の河川、肱川とその支流に注ぐ多数の小河川が複雑な地形を形成しています。

《子どもたちに夢を…

人々に歓びを…》

学生時代に、夏は三重県の鈴鹿山麓を拠点に四十日間のキャンプ活動、秋から冬にかけて毎週児童館めぐりでのクラフト指導、ゲーム指導などを行っていました。

その後、地元での就職を希望し

ていた私は、町職員を選びました。その際、学生時代の経験を生かせる児童館、幼稚園を希望していたところ、保育所への配属が決まり内心ショックを受けました。

しかし、その当時、町の愛護班活動の中で活躍をされている二人の方に出会い、昭和五十六年、二人の仲間を集め「野村町レクリエーション研究会」を発足しました。このことが現在の私の原点だと思っています。当時の活動は、レクリエーション活動の普及、各地区愛護班活動の手伝い、その他中央研修会への参加、また、県内レクリエーション協会との交流会を中心に行っていました。その後、「研究会」から「協会」に移行し、会員も二十名を越え活動も活発になってきました。



源氏ヶ駄場から元気に下山

《大自然の中で》

私の夢は、自分のキャンプスクールを開校することでした。そして「故郷に帰って十年の間に必ずやる」ということをずっと心の中に秘めていました。

保育所から幼稚園、社会教育課と変わり、平成元年、公民館主事一年目、当時レク協会会長を務めていた私は、念願の夢がかなないレク協会主催で、参加者二十七人（県内二十五人、県外二人）二泊三日の第一回目のアドベンチャースクールを開校することができました。

このスクールは、県内の青少年が自然に親しみ、挑戦することによって、自然を愛する心とたくましい身体を養い、また、町外の子どもたちが野村町での生活体験や集団生活の中で友情を培い、野村町のファンをつくり、地元の子どもたちは都会の子どもたちと接することでの刺激を与えていくことを目的に呼びかけ、感動のうちに成功を収めました。

第一回目のスクールの成功がき

っかけて、翌年から、レク協会・

町教育委員会の共同事業となり、

六泊七日参加者五十人に拡大、三

年目から現在の百人の大人数とな

りました。また、年々と参加申し

込みも多くなり、参加できなかった

保護者からの要望で、アドベン

のミニ番、「ガキ大将スクール」(三

泊四日・参加者五十人)も平成四

年度から開校しました。

現在、夏休み期間を利用し、二

本の自然体験スクールを子どもた

ちと一緒にを行っています。

キャンプの内容は、前半惣川地

区船戸川源流探検、グループワー

ク等の実生活に役立つ体験をし、

後半のチャレンジコースでは今ま

での班を解体し、自主性を育てる

ために自分の意志でA・B・Cの

コースを選択し、各

コースごとで大野ヶ

原の大自然に体当た

りで挑戦します。野

外活動が中心のため、

スタッフ一同、安全

面、健康状態に万全

を期して指導に当

たっています。

この運営は、福祉

活動に熱心なネット

ワークを活かし、地

元レク協会はもとよ

り、公民館主事、愛

媛県VYS連合会

(大学生)及びその

OB、地元野村高校

生有志で行っています。VYS・

OBの中には、毎年仕事の夏休み

をアドベンに充てて参加してくれ

たり、「一日でもいいから参加し

たい」と遠く神戸・博多から駆け

つける人もおり、彼らの熱意には

頭が下がる思いです。

子どもたちは、一週間の活動を

通じ、自然に対する優しさ、友達

に対する思いやりの心を育み、そ

して「感動」を胸に大野ヶ原を後

にします。

参加保護者の手紙から

ここで参加していただいた子ども
の保護者からの手紙を紹介しま
す。

前略 わがまな娘二人、

一週間、里帰りさせていただ

き有り難うございました。私

たちには田舎がないのでこん

な機会でもない限り、自然に

親しむ事などできません。昨

年参加することができなかつ

たので、今年は行く前から大

変楽しみにしており、また

帰ってから話がつきません

でした。スタッフの皆様の心

からのご指導に感謝します。

ありがとうございます。

松山市から参加

このように、私たちは子どもたち
が無事に帰り、アドベンがきつ
かけで親と子のコミュニケーション
がとれ、その子どもの思いが親
を通じてこちらに伝わってきたと
き、いいようもないほどの感動を
受けます。

愛すべき人たちへ

参加した子どもたちが「必ず来
年も参加する」と言ってくれます。

今後、この事業を通じ「交流」

ということをテーマに、リピー

ターネットワークを基本として、

町づくりの起爆剤になるよう発展

させていきたいと思っています。

「自然を愛し

子どもの心を愛せる人に」



ガンバレ、激流に負けるな!! 源流探検



生活者感覚の

まちづくり

地域総合研究所

猪爪 範子

情報は地域をこえて

わたしの事務所には、毎日のように全国各地からさまざまなニュースレターが届く。最も多いのは自治体の広報誌であるが、ここにきて目立つのは、個人のニュース

レターが増えたことだ。地域の細々した催しものを伝えたり、自主的住民グループの活動経過報告、社会的事件や出来事への意見や評論など内容は多彩だ。

宮崎県延岡市の土井さんからは、「Campanile」

が送られてくる。この夏で通刊十一号を数えるが、発行はマイペースらしい。「一年間ご無沙汰してしまいましたが」という冒頭のあいさつ通りに、彼女の東奔西走ぶりがしのばれる。延岡を始めとした九州各地での講演やイベントの記事からは、小さなニュースレターを通じて結ばれた広範囲のネットワークを知ることができる。

山形県鶴岡市の橋本さんからもコンスタントに「すてきにTurukaka」が届く。A5版とサイ

ズはミニだが、表紙には季節にふさわしい詩と写真が載せられ、次のページから市内の小さな催事やお店の紹介、生活への意見などが続く。不用品交換のフリーマーケットを主催したり、不人気だったタイ米を集めて料理教室を開いたりという、独自の活動報告が面白い。

まちづくりの先端指標は

生活者のなかに

ニュースレターの発信者は二人とも女性だ。元気で陽気で好奇心に満ち、個性的という点が共通している。それに、二人とも仕事を持っている。土井さんは建築事務所、橋本さんは水道の配管工事会社。詳しく聞いたことはないが、夫婦共営なのだろうと推測している。仕事の上では夫のビジネスパートナーとして発言力を持ち、しかも生活者としての感性も十分磨かれている。

こうした女性たちの活動が今、全国各地で静かに拡大している。もったいない、かわいそう、きれい、おもしろい、おそろしい……動機は自分自身の単純な生活上の実感にあることが多い。だから、理論武装したり、しかるべく根回しをしたりなどしない。

ただし、仕事によって社会のありようをよく知ってもいるから、無理はしない。自分たちのペースを大切にしながら、やりたいことは時間が経たなくてもきっちりとする。

例えば、女性の「もったいない」感覚は、全国各地でリサイクル活動の試行を先導した。牛乳パックの回収と再利用、資源ごみの分別回収、古着の回収と資源化、家電や家具や自転車の修理と再利用などなど。その延長で、フリーマーケットやガレージ・ショップなどの新しい生活の場が開拓され、いまでは日本各地に定着している。

住民パワーに着目した ユニーク施設づくり

小さいながら面白い地域施設として視察者の絶えない東京都北区立「富士見橋エコー広場館」などは、こうした住民の意欲を行政事業に繋げてヒットした好例のひとつといえる。この施設は、東京二十三区のひとつである北区役所によって建設された資源ゴミの回収とリサイクル活動の拠点である。主目的は資源ゴミの回収場兼啓蒙普及の場づくりであるが、それだけでは面白くないので、廃品利用の工房を併設している。

たいいていの人は、使わないけれどももったいなくて捨てられない品物を抱えているものだ。いわゆる「タンスの肥やし」といわれるものだが、着物から洋服をつくる、裂き織りをしてテーブルセンターをつくるなどの工房に指導者と道具があるので、活用したいものをそこに持ち込めば、再利用のノウハウを覚えてくれるし、その場で自分でやることができるようにも

なっている。廃品を材料にして生み出された多彩で魅力あふれる作品づくりは、都会の一村一品運動のようでもある。

同様の趣向で、今後全区に八館を建設する予定であるというが、一号館である富士見橋の施設は、長い間地域で廃品回収に取り組んでいた女性区民たちに管理委託をしている。ここでは、やる気と能力のある住民と行政の協働によって、新しい公設民営方式を確立したといえる。

行政計画に 生活者の参加を

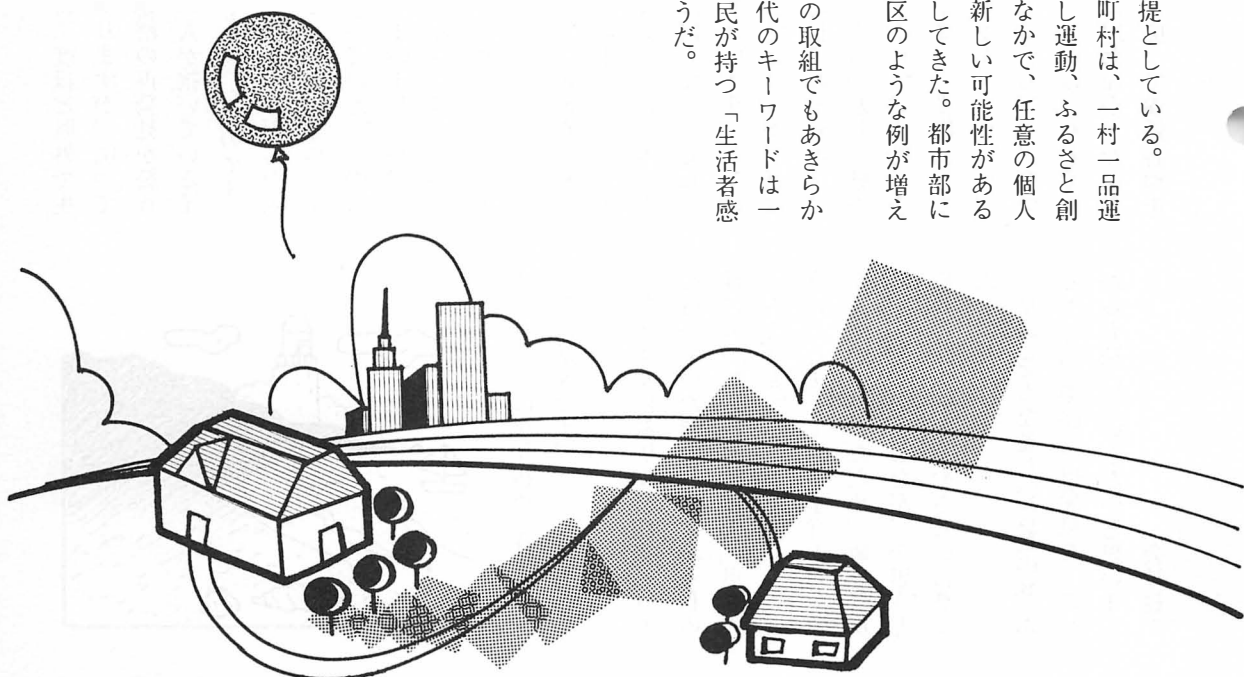
徳島市は新長期計画に市民参加都市を掲げている。その一環として、先頃「徳島まちづくり楽会」を発足、参加者を公開募集した。

徳島県も新長期計画の策定プロセスに、ワークショップによる一般県民の参加を予定して公募を開始した。どちらも、組織代表者をもつて住民参加をはかる従来の方式とは違って、生活者である個人の自

発的参加を前提としている。

主に郡部の町村は、一村一品運動、ムラおこし運動、ふるさと創生事業などのなかで、任意の個人の活動にこそ新しい可能性があるという体験をしてきた。都市部においては、北区のような例が増えている。

徳島県・市の取組でもあきらかのように、時代のキーワードは一人ひとりの住民が持つ「生活者感覚」にあるようだ。



ふるさと再発見

松山市

森 恭子



『旅行が好きです!』

とは言っても、先立つものがないことと、思い立つまでに時間がかかる性分から、数えるほどしか出かけてはいませんが・・・。

旅の楽しみはいろいろ。出掛ける前に踏み入れたことのない地をあれこれ想像する楽しさ、移動するときのワクワクした楽しさ、現地で美しい景色に酔いしれ、美味しいものに舌鼓を打つ楽しさ・・・。戻ったら戻ったで写真の整理をしながら「あの時は・・・」などと回想することも、旅の醍醐味でしょう。

そして何よりも、旅は私に慣れ親しんだ地を再発見する楽しさも与えてくれます。

数年前、海外旅行にでかける機会に恵まれました。私にとっては初めての出来事。そんなこともあつてか、現地でカルチャーショックを受け、帰国すればしたて日本の再発見の連続。日本人つておじぎをよくするんだ、とか、和食はとても繊細な味なんだ、とか。また、リングを摘むやいなや洋服でちよつとこすつてかじる現地の方にも、皆がひどく感心したことを鮮明に覚えています。

海外旅行にこだわらず、いつもと違った場所にしばらく身を置いた後は、普段と違った角度から物事をみつめることができ、新鮮で

す。私は過去に二度ほど県外で生活したことがあります。戻つてしばらくは、愛媛の再発見が続きました。他県の人が抱いているイメージとはおもしろいものです。「愛媛の人つて、みんなだんだん畑をもつていて、みかんをつくっているのかと思つていた」との言葉には笑つてしまいました。一方では「わがふるさととは、みかん王国なんだ」と改めて感心したものです。

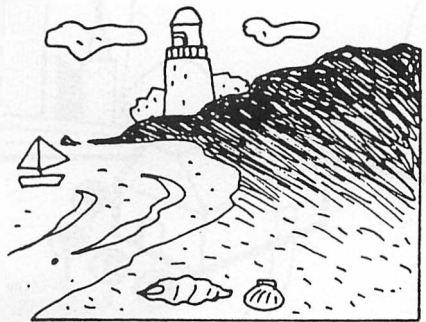
私は仕事柄、県内各地をまわらせていただいています。そんな折、訪問先の方々はよく「いやあ、うちの「まち」は何もなくつてねえ・・・」とおっしゃいます。多分にご謙遜もあるのでしょうが、私にとっては一市町村それぞれがオリジナリティーをもっており、魅力的なまちです。そして、そんなまちがぎゅつと詰まった愛媛は、やはり「だんだん畑をもつていて、みかんをつくっている」一辺倒ではないのです。これは、私が愛媛にいた間は特に思わなかったことだし、他県より戻つて愛媛各地を

訪れることになり初めて見えてきた愛媛県像です。

あれは久しぶりの帰省で、バスを待っていた時でした。ふと私の耳に入ってきた会話「奥さんすみません」「いいえのことよ(どういたしまして)」伊予弁からすっかり遠のいていたため、敏感に反応してしまいましたが、今思うと、やわらかい響きでやさしい言葉なんです。

私は、そんな愛しい言葉の郷(ふるさと)、愛媛の再発見を、これからも続けていきたいと思っています。

(会社員)



コミュニティづくり

城辺町
芝 育生

「おたくの会社の独身の方が組内に入られたのは初めてですね」

昨年四度目の転勤で城辺町に赴任し、住居のある地区の区長さんに挨拶に行った時の最初の言葉でした。住居をかまえた地区の活動に進んで参加するのは当り前と思っていた私にとって、区長さんの言葉には少々驚きましたが、よく考えてみると、会社の中でしか人的交流のない独身者が、見知らぬ地区の方と交流することは少々辛い。無理に組内に入ることは無かったのだと考えるに至りました。私は、青年団活動を通して地域の方々と触れ合う楽しさを知っているため、スムーズに参加でき

たのだと思います。

私が青年団に入ったのは、二度目の転勤で地元の広見町に帰った二十一歳の時でした。広見町の青年団は三地区の単位団と上部組織の広見町連合青年団で組織され、私は単位団である中央青年団に参加いたしました。

青年団員として、私は次に記した活動をしてまいりました。

一、地域とのふれあい行事

二、奉仕活動

三、スポーツ交流活動

四、研修活動

五、その他行事

その活動の多くは、地域の方々とふれあう行事であり、地域を盛り上げる行事でありました。また、活動を通じて、婦人会を始めとする多くの団体の方々と知り合うこ

とができました。

また、青年団活動を実践してきたことが認められ、総務庁主催の「青年の船事業」に参加することができ、現在、愛媛県青年国際交流機構の一員として、海外の青年の方々と交流しています。そして青年団活動を引退した今、自分が社会参加できる団体として、今後各種行事を運営していきたいと考えております。

さて、こんな私でも最近悩んでいることがあります。それは「今のままでは、地域のコミュニティーがなくなってしまう」ということです。昨年転宅し、その後、二度転宅したせいか、知らず知らずのうちに、地域との関わりを失ってしまったのです。たしかに地域の行事には参加し続けても、自主参加の姿勢が薄れてきているのです。

転宅の多いサラリーマンの方は特に、地域のコミュニティーの大切さを忘れた方が多いのではないのでしょうか。そして、会社の同僚とだけの小さなコミュニケーショで満足（特に独身者）している

方も多いのではないのでしょうか。

先日、今回入居する地区の区長さん宅にあいさつに行きました。

これからは、地元と新居での二重のコミュニケーションをとるのようになります。多少大変になるかも知れませんが、多くの方々と共に、自分の住んだ町に楽しい思い出が残るよう努力していこうと考えております。『町づくりは人づくり』とよく言われますが、私自身小さな力かも知れませんが、二、三年で転宅する弱い力かも知れませんが、積極的に地域に溶け込んでいくつもりです。このコラムを讀んでいる皆様の町に転宅した時は、よろしくお願いします。

（会社員）



リレーで
ちょっと
トーク

地 域 を 生 き る

「私たちのまちづくり」

西海町連合婦人会会長 池田 マキコ



私たちの婦人会活動の中で、平成七年度主に取り組んできた活動について紹介したいと思います。

海の幸・山の幸で

町おこし

西海町は、海のお花畑と呼ばれている宇和海海中公園や、雄大な景観の高茂岬等の豊かな自然に恵まれ、全国に誇れる観光地として発展してきましたが、オイルショック以後低迷し、観光客も随分減少しました。

しかし、平成三年には半潜水型水中展望船『ガイアナ号』が就航し、期待通りたくさんのお客を

呼び大変な人気となりました。その一方では、観光客の増加に、食事等のサービスが追いつかず、お客さんからの不満、苦情がでくるようになりました。そこで、婦人会では、観光客のニーズを充足し、町おこしをしようということになり、手作りのよもぎ餅・ところてん・酒まんじゅう・町特産のイリコを販売することから始めました。できるだけ自然のもの、ということでも、よもぎ餅に入れるよもぎは、婦人会員が町内の高茂岬



町おこしの勉強会

で採取しました。よもぎ餅、酒まんじゅう、ところてんは、七月～九月の土曜・日曜日、鹿島で手作りし、イリコと共に販売しました。観光客の皆さんには、「懐かしい味がする」と大変喜んでいただき、飛ぶように売れたのですが、作る量に限りがあり、直ぐに売りきれしてしまう状態でした。今後量的な問題は、婦人会員皆で考え、来年の夏は、もっとたくさんのお客に、町の特産品としてイメージしてもらえる様、町おこしに協力していきたいと思っています。



できることから

取り組んで

ゴミ問題は、現在大きな社会問題となっています。単に衛生的な処理や環境保全上の問題にとどまらず、生産から流通、消費まで関係する社会システムを考え直さなければならぬ厳しい現状です。西海町でも無制限に排出されたゴミを全て処理する、という従来までの方法では、最終処分場での処理能力に限界があり、対処しきれ

ない状況に至っています。

そこで、西海町ゴミ減量化等推進協議会が設置され、婦人会でもゴミ問題について検討しました。会員の中から、コンポストにより生ゴミの減量化ができるのでは、という意見がでて、早速町との話し合いの機会をもちました。結局、町から八〇%の助成で、希望する家庭にコンポストを配分することになり、婦人会の会員も、自ら積極的にコンポストの利用、普及に努めました。このことにより、平

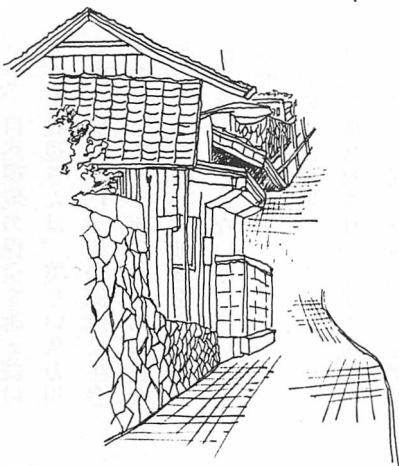


コンポスト
と生ごみを堆肥に

成四年十月以後、家庭から出る生ゴミは、一カ月に五〜六トンも減りました。金額にすると、焼却費用が一カ月十万〜十五万円の節約となり、一年間で百五十万円の節約ですから、この三年間で四百五十万円の節約となります。

こうしてできることから取り組み、ゴミ問題は、「一人ひとりの環境保全に対する積極的な取り組みによって、変えていくことができる」ということがよく分かったように思います。リサイクルできるものは分別し、まだ使用できるものは大切に使う。もったいない気持ちで極力使用することも大切で、過大包装を無くすために、買い物かごを持っていくなどして、大量消費、大量廃棄の社会経済のシステムを見直していくことが必要ではないでしょうか。

私たちのささやかな活動でも、継続することで実績が上がるものと信じて、これからも皆で頑張っていきたいと思います。



楽しみながら空き缶拾い

—久万中学校科学クラブ—

研究員 藤田 良

❖はじめに

久万町は、愛媛県の中南部、上浮穴郡の北西部に位置し、四国山地に抱かれた標高四百〜八百mの高原にあり、四国の軽井沢とも呼ばれる美しい町。石鎚山系・皿ヶ峰連峰を北に背負い、南北に三連

上浮穴郡久万町の久万中学校科学クラブの子どもたちが、久万町役場の裏手にある久万川の支流を舞台にして、河川浄化のための取り組みを始めた。

今回、この取り組みを詳しく取材するため、仕掛人であり、久万町商工会の経営指導員として、また、えひめ地域づくり研究会議の運営委員として、“まちづくり”に取り組んでいる渡辺浩二さんを訪ね、お話を伺った。

の山並みが走り、久万・畑野川・直瀬・父二峰の四盆地を形成している。この盆地を流れる四つの川は、ともに仁淀川の源流であり太平洋に注ぐ。この河川に沿って水田が開け、その外側に畑が続き、ゆるやかな山麓に接している。

このような、農山村の美しい風景が残る久万町であるが、生活排水等による河川の汚染は少しずつ進行していた。

❖仁淀川の源流に生きる者として

もともと久万町は住民活動の活発な地域で、町をあげての、また、各集落での、清掃活動や花づくりなどを積極的に行っている。しかし、河川の汚染は止めようがなく、美しかった久万川が日に日に汚れていくことに渡辺さんは胸をいためていた。久万町のみならず、国土保全というグローバルな視点から、「水環境フォーラム」の開催や



科学クラブのメンバーと協力者

(後列右から2番目が渡辺さん)

「海への手紙事業」の実施等を通じて、自然環境の保全を訴え続けてきた渡辺さんは、美しい久万川を取り戻し、「仁淀川の源流に生きる者として、下流に対する責任を果たす」ために、地域をあげて何かできることはないかと思い巡らせていた。

先の「水環境フォーラム」で、地元の間伐材を使って炭を焼いている人がいることを知り、活性炭としての炭の可能性に着目し、炭を河川の浄化に役立てることを考え始めていた渡辺さんは、「環境浄化のための住民運動を定着させるためには、子どもからの意識づけが大切ではないか」という思いから、今回の実験を思いついたそうである。そして、旧知の仲である久万中学校教諭正岡高好さんに話を持ちかけたところ、かねてから久万町の自然環境の今後を考えていた正岡さんの快諾を得、実験がスタートすることになる。

❖メダカの住める水を取り戻したい

平成七年七月二十二日、計画に

賛同してくれた愛護班のメンバーと、久万中科学クラブ員二十人が集まり、水質検査機器を使つての水質調査と、河川への炭の敷設作業が行われた。小川に七つの堰を造つてそれぞれに約五〇kgの木炭を埋め込み、炭の水質浄化能力により、河川の汚染がどの程度軽減されるかを調べようというのである。この検査は、毎週土曜日ごとに、現在も続けられている。

また、その日、子どもたちは双海町で育つたメダカ五十匹を放流した。久万中科学クラブでは、宇宙飛行士向井千秋さんらがスペースシャトル実験に使つた「宇宙メダカ」の飼育に取り組んでいるが、将来は「宇宙メダカ」が泳ぎまわるような、きれいな川にしたい」というのが、子どもたちの願いなのである。

実験当初は、良い結果が出るといふ保証があるわけでもなく、不安もあったことだろう。しかし、どんな結果が出るにしろ、久万川を美しくしたいというみんなの思いを一つにできたことが、一番大

切なことのようと思う。

幸いにも、実験は功を奏し、COD（化学的酸素要求量）やPH（酸とアルカリを測定する尺度）の数値が良い方向に推移しており、みんなの願いは確実に実を結びつつある。

ここで、正岡さんと科学クラブ員の大野隆くんからのメッセージをご紹介します。

―久万中学校 正岡教諭―

「久万町の川は、環境基準から言うと汚染されてはいませんが、



炭の敷設作業の様子

部分的に汚れているところも多く、理科の授業でメダカを探しに行つても、徒労に終わることが多い状況です。長期的な視野と方策で、なんとか清流を取り戻し、メダカや蛍のいる自然環境にしたいと思つておりました。そんな時、私などよりずっと早くから川の汚れを見つけ、久万町の自然環境の今後を考えていた方がおられました。商工会の渡辺さんです。渡辺さんのアドバイスを適宜頂きながら、久万中科学クラブは奮闘しています。」

―久万中科学クラブ 大野くん―

「久万中科学クラブでは、今年久万川に活性炭を入れ、水質がどのようにに変化するか実験しています。夏休みに地域の方と作業をし、さっそく水質の変化を測定しました。一回目の測定では、PHとCODが変化していることが分かりました。もっともっと実験を繰り返し、水質浄化をしていきたいと思えます。」

こうした子どもたちの奮闘は、今後、その結果以上に、地域の人々

に感動を与えていくだろう。

また、大野くんの言葉は、子どもたちが目を輝かして取り組んでいる様子を伝えている。

この実験では、水環境の改善とということだけでなく、子どもたちに環境保全やボランティア活動の大切さを知ってもらうという意味でも、大きな成果をあげつつあるように思われる。

✧終わりに

子どもたちの貴重な夏休みの時間をさいてスタートしたこの実験は、ほっとするような、さわやかな感動を私たちに与えてくれる。そして、世界的な規模で自然環境の保全が大きく叫ばれている中で、「自分たちも地域のために何かを始めよう」といった、子どもたちのそんな声さえ聞こえてきそうである。

子どもたちの夢見る、宇宙メダカが泳ぎまわる美しい久万川が、一日も早く戻ってくることを祈ると共に、子どもたちの今後の活動に期待したい。

研究員レポート 「まちづくり探訪」

研究員 大谷基文

※文化と芸術によるまちづくり

北陸自動車道を武生インターで降り、今立町役場に向かった。

今立町は、福井県のほぼ中央に位置し、和紙の里として知られる人口約一万五千人の町である。

千五百年の歴史と伝統を誇る越前和紙を全面に打ち出したまちづくりを展開している。

特に、平成元年全国にアピールした手づくりイベント「IMADATE展」では、町民がボランティアで作り上げた一万三千点の鳥や動物などの折り紙作品の展示や、和紙を素材にしたペーパーファッショニングが開催された。

このイベント成功の背景には、集落づくりがまちづくりという考えのもと「出前行政」として町長自らが町内七十三集落に出向いて、ミニ自治制度の集落づくりを推進し、住民自治の意識が浸透しているという経緯があるようである。

そして、その作品を展示保管する場所として、また、文化芸術活動の機会に触れる場所として多目

的な機能を持った「いまだて芸術館」(アートホール31)が建設された。

この施設は、俳優の川津祐介さんが館長を勤めると共に、ユニークな運営方法が行われている。音響設備や照明設備の操作をはじめ技術・運営スタッフを町民から募集し、半年の研修を終了した人たちがボランティアで行う技術スタッフ委嘱システム、コンサートや演劇等の開催をやってみたいという希望者自らが自主企画で運営する企画プロデュース委嘱システムを取り入れている。住民が主体となったまちづくりの新しい姿ではないかと思う。

観光の面では、体験施設「パピルス館」で紙漉きをしてから、せらぎや噴水のある「和紙の里通り」を通り、和紙に関する資料を集めた「和紙の里会館」を見学して「パピルス館」まで戻ると、和紙が出来上がっているという観光コースをつくっている。「和紙の里通り」の両側は、私有地で町民が土産物店等を営業していた。

また、剣豪佐々木小次郎の生誕の地ということで、宮本武蔵の生誕の地である岡山県大原町と姉妹縁組みを結ぶと共に、地域住民が自分たちで建立した小次郎の銅像を中心として小次郎公園を整備している。

常にユニークな企画で町の活性化に取り組み、住民のパワーを感じさせられた。

※地域に根差したユニークな活動

二日目、丹後半島の西の端にある網野町の網野ふるさと塾を訪ねた。網野町は、「丹後ちりめん」と鳴き砂の「琴引浜」が有名な町である。

そんな町で、イベントをはじめユニークな活動をしている網野ふるさと塾の塾長山崎欣一氏を訪ねた。

網野ふるさと塾の歴史は古く昭和四十七年に結成されている。会則、会費はなく、開放的で柔軟な集合体であり、その時々々の活動に参加するものが塾生となる。

結成のきっかけは、高度経済成

六月五日から三日間、福井県、京都府方面へ研修に行きました。福井県は、芸術によるまちづくりを行っている今立町を、京都府では、ユニークな活動を続けている網野ふるさと塾、赤煉瓦によるまちづくりを進める舞鶴市の研修報告をします。

長期に将来を担う子どもたちはもちろん、社会の核である大人たちが陥った心の荒廃に直面したことであり、人々がそうした状態を脱し、心の豊かさを取り戻すことを目指して取り組みを始めた。

形式にこだわらず楽しみながら、本音を語り合い活動し「続ける、重ねる、つなげる運動」を地道に行うことを基本としている。

また、活動の拠点として山小屋「丹のブータロ^{あかね}」を建て交流の場としている。実際に中に入ってみ

たが、結構広くて暖炉というのか囲炉裏^{いろり}というのかそういうようなものがあつて、もちろん宿泊もできる。その夜は、その丹のブータ

ロで、塾生のメンバーと交流会を持つてもらった。建設業、役場職員、織物業、手漉和紙・草染染職人等いろいろな職域の方々が集まり話題も豊富で、何より生き生きしている。そんな情報交換の中から、ユニークな発想で新しいイベントの企画が出て来ることが伺えた。

今までのユニークなイベントを

いくつか挙げてみると

○子午線ガムシヤラハイク

○端午の節句に丹後でタンゴの音楽会

○本の国体

○子午線・国体うたの散歩道

○絹のシンポジウム

等数多くのイベントを実施しているが、イベントは手段であつて目的じゃないと山崎さんは言う。網野町を心豊かな町にしようという使命感のようなものが感じられた。

❖赤煉瓦によるまちづくり

最後の研修先である舞鶴市へ向かう。

舞鶴市の赤煉瓦倉庫は、戦時中軍の武器庫として使われていた物であり、住民は暗いイメージを持っていたという。

舞鶴市の赤煉瓦によるまちづくりは、市役所の職員有志の「まち研」から始まる。その中から「まいつる建築探偵団」（八名）が発足し、市内の赤煉瓦の建築物がどれくらい残っているか調査が始まる。この調査から発展して、貴重

な赤煉瓦の建築物を保存しているという活動になり、全国規模の「赤煉瓦ネットワーク」につながって、市民も一緒になった「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」が設立された。

現在は二百名近くの会員を持ち、実行委員会を組織して、毎年一流のミュージシャンを迎え、赤煉瓦倉庫の前で野外ジャズコンサートを開催している。運営費については、市から三百万円の補助を受け、あとは協賛金やチケットの売上げで賄っているそうであるが、

いつも赤字寸前だということであった。実行委員の相当な情熱と努力がないと五年間も続いていないと思う。

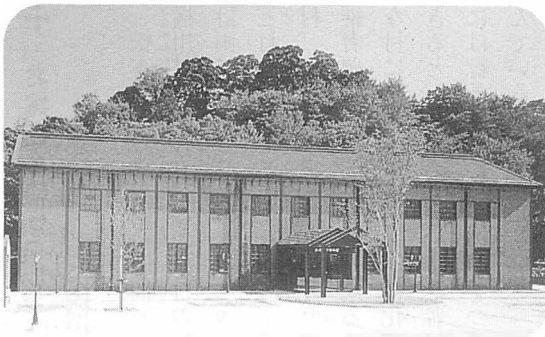
そして、平成五年に世界ではじめての赤れんが博物館がオープンした。赤煉瓦の倉庫を使い、建物自体をできるだけそのままに近い状態で保存することを考えて造られているようである。また、古代文明の遺跡の煉瓦等、世界各地から貴重な煉瓦が集められているのには驚かされた。

こうした成果が得られたのは、住民と行政が一体となり、情熱と知恵と労力を出し合った結果であることを忘れてはならないと思う。

❖終わりに

各地域ともそれぞれ固有の資源を活かし、住民が主体となったまちづくりを推進しており、多くのことを学ばせていただきました。

最後になりましたが、今回の研修先でお世話になった関係者の皆様にお礼を申し上げて、研修報告にさせていただきます。



舞鶴市立赤れんが博物館

研究員レポート 「不思議の国 長野」

研究員 酒井 康 次

一二〇の市町村の中に、標高二〇〇〇メートルを超える大山脈を抱える長野県、今まで数多くのまちづくり先進地を産み出してきたこの土地を、今回、まちづくり研修のため訪問させていただいた。

当初、研修地として長野を選び、具体的な研修先を検討する際に、

新しい発見を期待しながら、まずは事前調査のために「全国まちづくり情報」のキーを叩いた。そして様々な資料を吟味した中から、面白そうな展開をしている「楢川村・山口村・小谷村」を訪問することとした。

❖「不思議の国の信州人」

最初にお国入りの挨拶も含めて長野県庁を訪ね、地方課中沢主事から説明を受ける。前段にも書いたとおり長野県は一二〇の市町村、大きく一〇の地域に分かれる。それぞれ地域の個性が強く、市町村ごとの交流が少ないのが特徴だという。人間性も大きく異なりそのことを表した「不思議の国の信州人」といった本まで出版されている。県では、それらの特色を活かしてグループ活動の交流を積極的に行っていた。また、一九九八年にひかえた長野オリンピックのための高速道路整備や関連施設の建設も産業面に活気を与えていた。

❖「お嫁さんいらっしやい」

・ ・ ・ 楢川村

松本市から車で約一時間三〇分、楢川村を訪れる。ここは村の総合計画に「お嫁さんいらっしやい」と打ちだしたユニークな考え方の村。主産業である漆器づくりの後継者確保を目的に、嫁が来るような村にすれば、自然と活性化ができるという考え方で、後継者対策には総予算の約五分の一をつぎ込んでいる。

また、楢川を代表する中山道の宿場「奈良井宿」の町並み保存に



天保の大商屋「中村邸」を見学

も力を入れていた。総額約三億円をつぎ込み、電柱を移転、消火栓を移動した。家の建て替えも村が約八割を補助、景観整備に努めている。そして驚いたのが、個人に多額の村費を使う奈良井宿整備に対して他地域の村民からは全く不満が出ないということであった。奈良井宿が楢川村の生活文化にしっかり根付いているという事だろう。

現在は、山の尾根をいく中山道にかわり、川沿いをいく国道が西との動脈になっている。しかし、村が築き上げてきた楢川文化は全く変わっていないようだ。そんなノスタルジアを感じさせる。

❖はっと・ふっと・ほっと

ときめきの里 山口村

川の向こうは岐阜県との県境になる、農業を中心とした人口約二一〇〇人ほどの小さな村が山口村。中山道の宿場、馬籠宿と島崎藤村が生まれ育った地として若い女性に人気がある。

ここは、「はっと・ふっと・ほっと・ときめきの里 山口」をキ

ヤッチフレーズにやすらぎの農村を売り物にしたむらづくりを進めている。具体的には、現在残されている藁葺きの民家や道沿いの古い標識などを保存し、山口を訪れることによって、田舎ならではの心の温もりを感じるところにしようという「フィールド博物館」事業を実施している。また、馬籠宿周辺の住民による町並み保存の運動も積極的に行われ、独自で保存憲章を定め、馬籠の景観保護に大きな力を発揮している。「県境の恵まれない村から、中京地域のふるさとへ」と、歴史的価値のあるいなかづくりを推進中。田舎しかないから・・・を前面に押し出す村づくりのアイデアで生き残りをかけていた。

◆特産品のふるさと・・・小谷村

新潟県境に位置し、糸魚川が流れる小谷村、人口は約四五〇〇人。長野オリンピックスキーマインステージとなる白馬村が隣にあり、シーズンの観光収入が年間約一〇〇億に達する。



小谷漬を手にとる相沢さん

しかし、この村でのむらおこしのポイントは、夏場の観光づくりと特産品開発にある。特産品のオーナー制度にも早々と取り組んでいる。当初は郵便局に、特産品宅配の計画を持ちかけたところ断られ、それではと宅配業者とタイアップして実施したところ全国的に大ヒットしたという実績がある。また、山菜を始めとした特産品開発も農協と協力して行い、東京等での街頭販売なども村職員が売り子役をかってでるなど、販路づくりのPR活動を村が先頭に立って展開している。「PRをする事に

よって、地元に来てそこでしか食べられないものをそこで食べる」「大消費地への供給には消費者を満足させるだけの供給体制に限界がある」の理念から、アンテナショップなどには必要ないと判断するなど、市場と村の現状も十分に把握していた。

夏の観光客誘致のために「千国^{ちくに}街道・塩の道祭り」というイベントを実施。これは信州と越後を結ぶ物流経路の復活による、歴史伝統の掘り起こしイベント。街道沿いを広域的に結びつけ、昔の街道の風物詩を再現、そこを仮装して歩くといったもので、ありきたりのイベントにあきた人達が三千人あまりが詰めかけ、十五キロメートルあまりを歩くという。

小谷村は冬の観光に溺れることなく、資源の掘りおこしと特産品戦略をうまくマッチングさせている。また、開発当初から物ばかりに行っている着眼点の良さに驚く。「隣町で特産品の店をだしたからといって、自分の町も同じ様なこ

とをしていたのではどちらかは潰れる。全国的にそんな町ばかりじゃないですか？ 画一的な事で事業を行ってはダメ」「私の村では村おこしのためには、人殺し以外は何でもやれと言っています」と担当の方が話してくれた言葉が衝撃的だった。

長野県を訪ねてみて初めて知ったのが、面積の広さに比べて、利用できる土地が少ないということ。そんな環境の地で生活する中に人々は知恵を発揮している。そんな様々な生き方を、不思議の国の信州人といった姿が代表しているのかもしれない。

それに比べ、温暖な比較的平らな土地にある愛媛はまだまだ発展の余地がある。

「〇〇だから・・・ダメだ」といった甘えから脱却し、視点を変え頭をフルに活動させれば、面白いまわぐりもできそうだな。

そんな事を考え帰りの汽車では「あつ信州ソバを食べるの忘れた」と、食い気も忘れるほどの思い出深い県外研修であった。

風 おこしの ちかい

「一人のつぶやきを風に」

えひめ地域づくり研究会議

代表運営委員 高須賀 忠篤

知ってるつもり



日曜日のテレビ番組に関
口宏の「知ってるつもり」
というのがある。今夜は、
出世欲、残酷度ナンバーワ
ンの戦国武将「斉藤道三」
である。おそらくこの原
稿筆速では見るようになら
ないだろう。

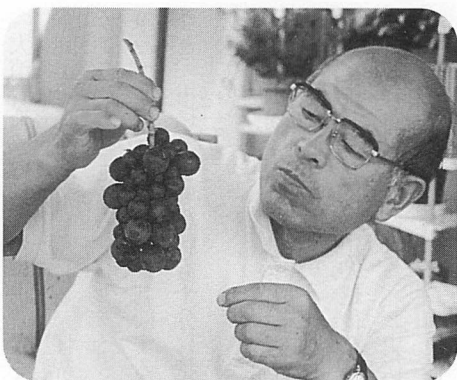
私たちはその人のこと、
その地域のことに
よく知っているつもりであ
っても、この番組を見てい
ると、何も知らない事に気
づかされる。

この番組を見ながら時々

思うのは、各地域で、「知ってる
つもり・私たちの町」とか、「知っ
てるつもり・おらが農協」といつ
た自作ビデオでも作ってみてはと
いうことだ。その町に生れ育った
のに、その町のことを何も知らな
かったと感じさせるような作品が
生れると面白い。

町おこし、地域づくりの中でこ
の事が一番大事なことの様に思
う。

サラリーマン現役当時、よく役
場や農協を訪ねた。その地区のこ



ブドウを手に真剣な眼差し
高須賀さん

とについて話合っているうちに、
「お前らよそ者に内輪のことはわ
かるまいが」と一喝されることが
あった。しかしだんだん各論に入
ってくると当のご本人も何も知っ
ていないようなことに……よく出
くわした。

知らないことよりも、知らない
のに知っているつもりと云うのが
一番曲者なのだ。

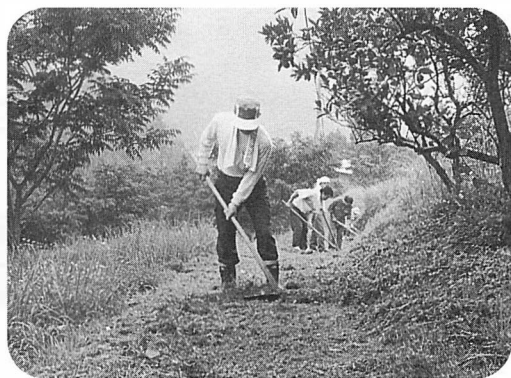
以前塾の先生から聞いた話だが、
「知らぬは先生と親ばかりなり、
子供たちは親の性のこと、いじめ
のこと、先生たちの私生活のこと
まで実によく知っている。権力も
何の力もない私たちには安心して
話してくれるのだ」と。

この町に住んで思うこと

退職金を全部はたいて、カアチ
ヤンの手を引き、この町に来たの
は五年前の六月だった。

みんな都会へ出て行くというの
に、今度来たのは何者だろう……
と、遠巻きに観察していた地域の
人たちも、だんだん本音で接して
くれるようになった。農協の総代

十人組の道づくり



欠席したら一万円、女性が出たら三千円出さなければならぬという決まりだ。女性しか居ない家庭では毎回三千円出さされるのかと聞いたら、その場合は免除されるとのこと。しかし、道づくりに出てみると、男女差が必要なような仕事というより、人間性による労働差の方が大きい。

一九五五年、今から四十年前の夏、私が学生だった頃、トウモロコシの交配種子を作るため、毎朝二時間くらい穂を抜いて回る仕事を請負った。四〜五人のパートを雇ったが、労賃配分について、男女差をつけることを要求された。しかし、同じ労働をするのだからと同一賃金で押し通したが、四十年も過ぎた今、この地に男女差別が厳然と生きている現実に出あい、社会変革のむつかしさを改めて感じる。

(一)道づくりと男女差別

この町に来て最初はいろいろと感じていたことも、その生活にドップリつかってしまつと、水や空気のようにだんだん感じなくなり、物の本質が見えなくなること

を恐れている。
ここに来て一番最初に感じたことは、年に二回道づくりがあるが、

の組のお世話役、班長さんは順回り制の一年交代である。我が家にも来年はその役と区長が回って来る。町の中の十軒と違って、山の中

の十軒は、一まわりするのも大変だ。それに朝早くか夜中でないと居ない。何回も足を運ばないといけないこともある。
伊予市では月に一回寄りを開き、伝達、集金、情報交換、時にはあまり物の野菜や苗の交換や、簡単な手芸講習の場になることもある

(二)班長という役

この集落組織の最小単位は十人組だ。「一軒減つたと思つたら、あんたらが来てくれたので、又十軒揃つた。」と喜んでくれた。こ



十人組を裏で

あやつる母ちゃんたち

という。そんな事例紹介も含め、月一回の常会を提案してみたが、みんな今まで交代でやって来たのだからと、聞く耳を持たない。

まだまだみんなと飲んだ酒の量が足りないであろう。

地域づくり研究会締め

えひめ地域づくり研究会議に入つて、最初に感動したのは、懇親会の終りにやる「地域づくり研究会締め」である。

ヨオ、の掛け声と共に、人さし指と人さし指で、チャチャチャンちゃちゃちゃん、チャチャチャンチャン、次は人さし指と中指の二本、次は薬指をくわえて三本、次は小指をくわえ、最後に五本指と手の平で締めるのである。カスカな音がだんだんとたしかな響きになり、力強いうねりになるのを実感した時、「地域づくり研究会議はすばらしい組織だなあ……」と余韻を大事に帰途についたものだ。活動の中味も一人のつぶやきを声に、意見に、提案へと広げていきたいものである。

産業情報の拠点

「産業学習館」

オープン！

東予市



市の産業を楽しみながら学習することが出来る施設です。

一階展示コーナーには、市内の製品を、身振りを交えながら説明する獅子エモン、働く人をテーマにした産業の木、企業紹介、瀬戸内道路マップ等があります。また、体験学習室では手漉き和紙によるはがき作りなどが体験できます。

二階には、テーマ展示室があり、季節ごとに市内の企業や団体に関係するものが展示されています。

また、産業学習室には、専門書や資格試験の図書が所蔵されており、皆さんに利用してもらっています。奥には、企業や団体等の研修などに利用してもらうための、移動観覧席百席、百インチのビデオプロジェクター、資料提示装置を備えた視聴覚室があります。

※開館時間 午前10時～午後5時

※休館日 月曜日、祝日、月末

日、年末年始

※問い合わせ先

東予市産業学習館

☎

FAX 0898 (64) 7181



石鎚の聖流郷と

もみじの里に

「おもひふるさとの駅」

オープン！

面河村

四国の尾根石鎚山、自然の美面河溪谷は本村の顔であります。

春の新緑、夏の清涼、秋の紅葉、冬の樹氷と四季折々の姿を求めて年間約四十万人の観光客が訪れ自然を満喫しています。

平成七年四月

に石鎚スカイラ

インより手前四

キロ地点に「おも

もふるさと」の駅」がオープンしました。既に完備されていた、ふ

るさと市場、特産品開発センター

を含め、公衆トイレ、大駐車場、

多目的広場、周辺への植栽、河川

への遊歩道等が整備され観光客と

のふれあいの場として、また憩の

場として利用されています。また

すぐ近くにゴーカートやつりばり

を楽しめるレジャーランドもあり

ます。

特産品開発センター、ふるさと

市場では、村内の特産品や新鮮な

野菜類、民芸品、手造りのまんじゅ

う類、川魚の塩焼きなども販売さ

れています。ぜひ一度お立ち寄り

ください。

※営業時間 四月～十一月

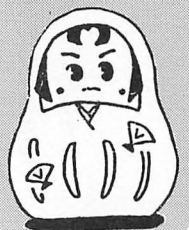
午前八時三十分～午後五時

※休業日 火曜日

※問い合わせ先

面河特産品開発センター

☎ 0892 (58) 2440





県内最大のログハウス 「交友館」完成！

小田町

この施設は、地元特産の木材をふんだんに使用し、約三百平方メートルのログ棟で構成されており、メインホールには、吹き抜け天井まで届く樹齢百年といわれる直径七十センチのカイズカイブキが使われ、石組の本格的な暖炉一基も備えております。このほか談話室一、和洋の研修室六、調理実習室一、シャワー室、トイレ等が完備され、一度に約百五十人が利用できます。

隣にはパーゴラと、あずまや

がある約千五百平方メートルの農村公園もあり施設ともども利用できます。

また、この施設は、ログハウス全国コンテストで最優秀賞に輝いており、小田町へお越しの際にはぜひ「交友館」の勇姿をご覧下さい。



※利用時間 午前八時三十分～

午後十時

※休館日 年中無休

※問い合わせ先

小田町農林振興課

☎ 0892 (52) 3111

愛媛にも 坂本龍馬の記念館が

河辺村

今もなお、全国的人気を誇る坂本龍馬の記念館・資料館は、高知京都を中心に十数箇所あります。

坂本龍馬が日本の夜明けを目指して脱藩するおりに、最初に足を踏み入れた地であり、最初の夜を過ごした地である伊予の国、その伊予の国、河辺村にも、坂本龍馬脱藩之日記念館が完成いたしました。

この記念館は、「山河海上九十一里、飛馬の如し」をサブタイトルとして、龍馬の全体像に迫るのではなく、自由人として生き始めた第一日目に河辺村を駆けて行く、その歴史的な日を捉えることを基本としています。

「脱藩之日」を中心テーマに捉え、その脱藩ルートを分かり易く説明し、維新前夜の日本の動きと龍馬の関わりを示すことで、龍馬の人間像に迫ってみました。

ぜひ一度ご来館ください。

※利用時間 午前八時三十分～

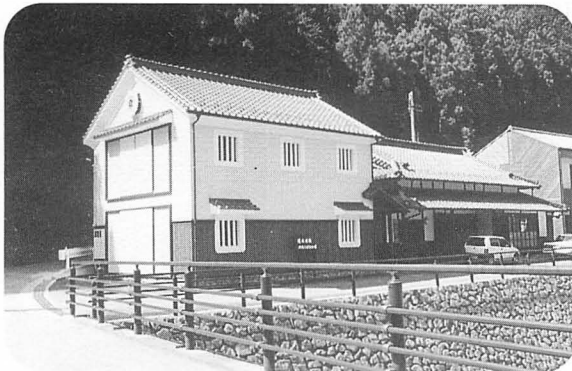
午後六時

※休館日 第二・四・月曜日

※問い合わせ先

ふるさとの宿

☎ 0893 (39) 2211



「圏民文化講演会」のお知らせ

八幡浜・大洲地域16市町村で構成する「ふるさと市町村圏」では、広域的な地域の活性化を進め、圏域の一体的・総合的振興を図ることを目的に「圏民文化講演会」を開催します。

全体テーマ 「文化が息吹く地域づくり21」

主 催 「文化が息吹く地域づくり21」実行委員会
八幡浜・大洲地区広域市町村圏組合、文化経済学会

プログラム

☆10月25日(水) ー前夜祭 in 内子座ー
「地域における芸能活動とまちづくりを考える」

16:30 開 会
16:40 第1部 郷土芸能の公演
大洲臥龍太鼓・長浜豊年踊り・藤縄神楽
18:30 第2部 茂山忠三郎会狂言会
20:00 閉 会

☆10月26日(木) ー文化講演会 in 五十崎町中央公民館ー
「文化が息吹く地域づくり21」

13:00 開 会
13:10 第1部 記念講演
木津川 計 (「上方芸能」編集長・立命館大学教授)
「趣味人とはだれをいうのかー人間らしい生き方と街づくりー」
15:00 第2部 シンポジウム
基調報告 池上 惇(文化経済学会会長、京都大学教授)
「生活の芸術化と街づくり」
パネルディスカッション
座 長 植田和弘(京都大学教授)
星島一夫(愛媛大学名誉教授)
パネリスト 山川浩一郎(梅錦山川株式会社社長)
松岡義太(町立久万美術館総務課長)
山本典夫(愛媛セラム株式会社社長、砥部焼研究家)
富田勝也(五十崎町企画財政課長)

17:00 閉 会

(問い合わせ先)

八幡浜・大洲地区広域市町村圏組合
八幡浜・大洲地方拠点都市対策室
TEL (0893) 24-0560

“八幡浜・大洲圏シンポジウムin宇和”開催のお知らせ

ふるさとに培われてきた伝統的な資源を活かした地域独自のまちづくりの展開と地域間相互の交流を深めることによる広域文化圏の創造について考えることを目的に開催します。

★ テーマ 「ふるさとを感動しよう」
～歴史・文化とまちづくり～

★ 日 時 平成7年11月22日（水） 午後1：00～5：00

★ 会 場 宇和町文化会館 大ホール（入場無料）

★ 主 催 八幡浜・大洲地区広域市町村圏組合

★ 出演者 コーディネーター
讃岐幸治（愛媛大学教育学部教授）
事例発表者及びパネリスト
江藤訓重（「北里木魂館」館長）
大戸真一（臼杵デザイン会議代表）
永江孝子（南海放送アナウンサー）
河野泰成（城川町長）
渡辺好明（「中町を守る会」会長）

★ プログラム

13：00 開 会
13：15 シンボルマーク、キャッチフレーズの発表及び表彰
13：30 ふるさとトーク [まちづくり事例発表]
事例発表者 江藤訓重、大戸真一、永江孝子
14：30 郷土芸能 「宇和神楽」（明間神楽愛好会）
14：50 休 憩
15：00 ふるさとミーティング [パネルディスカッション]
テーマ「ここにしかないまちづくりに向けて」
コーディネーター 讃岐幸治
パネリスト 江藤訓重、大戸真一、永江孝子
河野泰成、渡辺好明
17：00 閉 会

（問い合わせ先）

八幡浜・大洲地区広域市町村圏組合
八幡浜・大洲地方拠点都市対策室
TEL（0893）24-0560

地域づくりビデオ（貸出し）のご案内

当センターでは、「地域づくりビデオ」を備え、無料で貸出しをしています。今回下表のビデオが新しくそろいました。ぜひご利用ください。（貸出し期限は原則として2週間以内です。）

No	タ イ ト ル	製 作 者
115	愛の一字がまちを変えた（滋賀県愛東町）	N H K
116	ふるさと再発見～21世紀のふるさと創造 ～力強いいきいきとした産業づくり～（その2）	愛媛県
117	ふるさと再発見～21世紀のふるさと創造 ～快適で個性あふれる地域づくり～（その3）	愛媛県
118	ふるさと再発見～21世紀のふるさと創造 ～創造的で豊かな人と文化づくり～	愛媛県
119	えひめふるさとギャラリー（2巻）	（財）愛媛銀行ふるさと振興基金
120	ふるさと再発見～21世紀のふるさと創造 ～力強いいきいきとした産業づくり～（その3）	愛媛県
121	ふるさと再発見～21世紀のふるさと創造 ～幸せで明るい長寿・福祉社会づくり～（その3）	愛媛県
122	ふるさと再発見～21世紀のふるさと創造 ～創造的で豊かな人と文化づくり～（その2）	愛媛県
123	ふるさと再発見～21世紀のふるさと創造 ～平成6年の県政の歩み～	愛媛県
124	公開討論会 「21世紀への潮流とまちづくり」	えひめ地域づくり研究会議
125	ふるさと再発見～21世紀のふるさと創造 ～快適で魅力のある地域づくり～	愛媛県
126	ふるさと再発見～21世紀のふるさと創造 ～力強いいきいきとした産業づくり・発展を支える たくましい県土づくり～	愛媛県
127	えひめふるさと博物館（東予篇）	（財）愛媛銀行ふるさと振興基金
128	えひめふるさと博物館（中・南予篇）	（財）愛媛銀行ふるさと振興基金
129	いま、出逢いに一番近い街 （市制40周年記念広報ビデオ）	伊予三島市
130	にんげんマップ 「夕日の町を売り出せ」（双海町）	N H K

縁側に座って月を眺めながら、
美しい虫の声を耳をかたむける
…。いい季節になりました。
秋といったら芸術の秋。お弁当
を持って紅葉狩り、ついでは
ちよつと気取ってスケッチなん
ていうのもいいですね。
今年はぜひ挑戦してみたいで
す。

内容についてのご意見や活動
内容についての記事など、お気
軽にお寄せください。

「舞たうん」編集係

篠浦まで

〒790 松山市三番町八丁目

一三四番地

愛媛県生活保健ビル三階

（財）愛媛県まちづくり

総合センター

TEL 0899(32)7750
FAX 0899(32)7760

発行／平成七年十月十日

（財）愛媛県まちづくり

総合センター

（財）愛媛県市町村振興協会